

令和 5 年 4 月 11 日現在

機関番号：32612

研究種目：若手研究

研究期間：2019～2022

課題番号：19K13782

研究課題名（和文）イノベーションの発生に影響する組織の「形」と「広さ」についての研究

研究課題名（英文）New Organization Design for Innovation

研究代表者

岩尾 俊兵（Iwao, Shumpei）

慶應義塾大学・商学部（三田）・准教授

研究者番号：50823895

交付決定額（研究期間全体）：（直接経費） 2,600,000円

研究成果の概要（和文）：本研究では、組織の形が組織構成員同士の繋がりやすさに影響するという発見があった。筆者はこの「組織構成員同士の繋がりやすさ」のことを「組織の広さ」と表現した。そして、組織の形が組織の広さに影響し、組織の広さがイノベーションの発生に影響することが分かった。具体的には、組織の中でアイデアと資源が別々の場所に滞留すると、イノベーションが起こりづらくなることが判明した。つまり、アイデアと資源をそれぞれ豊富に持っている組織であっても、イノベーションを起こせるとは限らないのである。この発見から派生した研究を、筆者は、国際学術誌と国内学術誌と商業誌と書籍において、広く社会に公開した。

研究成果の学術的意義や社会的意義

これまで、イノベーションの阻害要因を、アイデアの欠如に求めたり、資源不足に求めたりする言説が流行していた。しかし、本研究によって、こうした言説が大きな間違いを抱えている可能性が分かった。すなわち、実際には、アイデアも資源も十分すぎるほど存在しており、それら2つが出会わないことこそが問題となる場合が発見されたのである。このことは、近年、イノベーションの必要性が叫ばれる中で、企業のイノベーション・マネジメントだけでなく政府のイノベーション政策に対しても再考を求めるという意味で社会的意義があるといえる。また、学術的にもこうした発見は、これまでなされてきていなかった。

研究成果の概要（英文）：In this study, we found that the shape of an organization affects the ease with which its members can connect with each other. I expressed this "ease of connection among organizational members" as "organizational breadth". It was then found that the shape of the organization affects the breadth of the organization, and that the breadth of the organization affects the occurrence of innovation. Specifically, it was found that when ideas and resources stagnate in separate locations within an organization, innovation is less likely to occur. In other words, even if an organization has an abundance of ideas and resources, respectively, it may not necessarily be able to innovate. The research derived from this finding has been widely published in international and national journals, commercial journals, and books.

研究分野：経営学

キーワード：イノベーション 組織形態 人工社会実験 知識創造 資源とアイデアの滞留

科研費による研究は、研究者の自覚と責任において実施するものです。そのため、研究の実施や研究成果の公表等については、国の要請等に基づくものではなく、その研究成果に関する見解や責任は、研究者個人に帰属します。

## 1. 研究開始当初の背景

研究当初の背景として、筆者の2019年以前の研究テーマであった「日本の自動車メーカーにおける改善とイノベーションの関係」についての一連の発見が存在していた。

すなわち、今回の研究の着想に至った経緯としては、これまで筆者が「改善活動と組織設計の関係について」の博士論文を作成する中で、追加的にコンピュータ・シミュレーションをおこなった際に、奇妙な現象が観察されたことによる。

2019年までの筆者の研究は、経営学分野においてイノベーションの一特殊形態（インクリメンタル・イノベーション）とされている改善活動について取り上げた。そして、組織設計が生産現場における継続的な改善活動の成果に与える影響について、実証分析と仮想実験とを用いて考察した。このとき、既存研究の多くは、規範論的な観点からみて成功したインクリメンタル・イノベーションの具体的記述をおこなってきた。

こうした状況に対して、筆者は、規範的な継続改善活動組織論→個別改善事例研究という既存研究の論理展開に対して、実証的な個別改善事例研究→実証的な継続改善活動組織論という論理展開をおこなった。さらに、こうして実証的に観察された個別改善活動群が必ずしも「完結性・小規模性・工程革新性・組織的分権性」といった前記の規範的特徴に一方的に限定されず、むしろ「連結性・規模的異質性・製品革新性・組織的複雑性」なども観察されること、そのいわば集計的結果として継続的改善活動に規模的分布等の多様性が観察されること、そうした多様性に対して継続改善の組織設計（分権的作業組織・工場技術員制・本社生産技術組織など）が影響を与えること、といった点を実証的に示した。しかも、これが全体の5%以下の特殊なコミュニケーション・ネットワークによって生まれることが、自動車産業事例を基にしたコンピュータ・シミュレーションによって示されたのである。

こうした研究は、イノベーションの技術決定論という従来の研究の立場を一部変換し、イノベーションの組織決定論を論じたという特徴がある。すなわち、組立産業、装置産業、半導体産業、自動車産業といった産業ごとの技術体系によってそこで生じるイノベーションの性質がことなるとする見方に対し、イノベーションは個別産業内の各組織の組織形態・組織構造によって変化するという新しい見方を打ち立てたのである。このとき、ここで観察されたようなイノベーションと組織設計との関連性はインクリメンタル・イノベーションだけでなく、イノベーション一般に通じるものなのか？自動車産業だけでなく産業一般に通じるものなのか？といった追加的な疑問が生じた。そこで、より広い視野において上述の研究を進めようというのが、2019年時点の問題意識であった。

すなわち、国内外の研究動向として、少なくともインクリメンタル・イノベーションというイノベーションの一種においては、ある種の「決めつけ」を前提にした詳細な議論が行われていた。これに対して異を唱えたのが、筆者の『イノベーションを生む“改善”』（有斐閣）であった。そこで、これを発展させ、むしろイノベーション一般の理論もベンチャー対大企業という「決めつけ」ゆえに研究余地を狭めていないか？という疑問を深耕していくことにしたのである。

## 2. 研究の目的

本研究の目的は、イノベーションが発生しやすい組織の特性について新たな知見を獲得することであった。そのために、応用数学の一分野であるグラフ理論と経営学における経営組織論、さらに研究方法としてのシミュレーション分析・企業実証調査・理論モデル構築を組み合わせながら研究を進めた。

これまで、組織の規模と発生イノベーションとの関係については、トンプソンといった古典的な研究者から、クリステンセンといった比較的最近の研究まで、多くの指摘がなされてきたとこ

ろである。このとき、こうした研究群では「スタートアップ企業対伝統的大企業」といった図式が想定されることも多かった。しかし、こうした想定は、日本の経営現場において必ずしも普遍的に当てはまるわけではない、というのがこの研究の出発点である。むしろ、日本においてみられるのは、「イノベティブな伝統的大企業対ノン・イノベティブな伝統的大企業」「イノベティブなスタートアップ対ノン・イノベティブな中小企業」といった同一区分内での棲み分け現象ではないかと捉え、こうした差異はグラフ理論とコンピュータ・シミュレーションを経営学に応用することで説明できるのではないかと考えた。

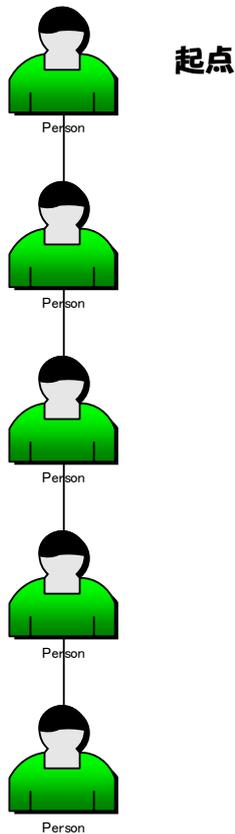
### 3. 研究の方法

これまで述べた研究目的の達成のため、この研究では組織の「距離」という新しい概念を提案し、これがイノベーションにいかなる影響を与えているのかについて考察した。

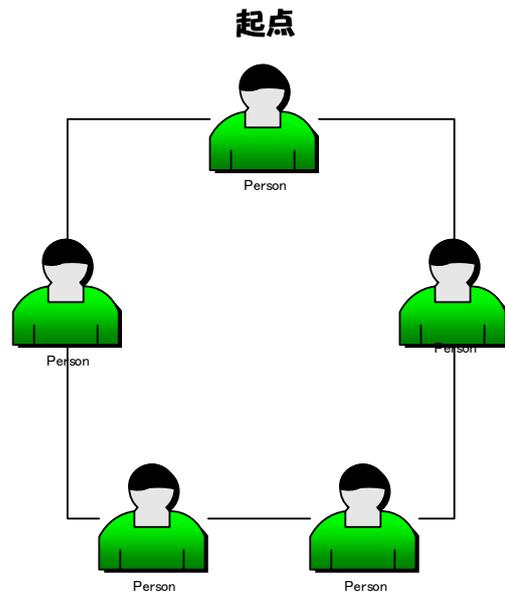
前提として、2人以上の人間の集合体を考える。それぞれの人間（組織成員）は他者とコミュニケーションする経路を1つ以上持っているとして仮定する。このとき、組織成員のうち任意の2名をランダムに選び出した際に両者の間に何人の他者が存在するかについての指標が組織の「距離」である。すなわち、組織成員 A が何人を介した伝言ゲームで望んだ人（組織成員 B）にいきつくかについての指標が組織の距離である。

このとき、単純な組織の規模（組織成員数）が同一であっても、上記の距離という指標は異なる数値を取ることが、単純な思考実験から分かる。たとえば、直線に100人を並べた場合には、端から端まで99の距離を持つが、この直線の端をつなげて円環にした場合、ある点から最も遠い人物までの距離は49程度である。これを応用し、樹形図的なネットワーク形態における組織の距離なども、シミュレーション分析を通じて明らかにされる。こうした研究は、「距離間の近い組織、遠い組織」といったビジネスパーソンの実感を、数理的・実証的に解明できるという特徴があり、これは分野横断的研究という特色を持つ本研究ならではのものであると考える。

本研究は、上記の問題設定に対して、数学とシミュレーションを伝統的な組織論の研究に用いつつ、アプローチしていった。これは、同じ人員の規模の組織であっても、組織内の他者との繋がりのやすさにはネットワーク形態によって差異があることが、主に数学の一分野であるグラフ理論と、シミュレーションを用いたスモールワールドネットワーク説によって部分的に示唆されており、数学とシミュレーションの知見を経営組織論に取り入れることが有意義であろうと予想されたためである。すでに述べたように、たとえば直線と円環のコミュニケーション経路では以下のような違いがある（Figure 1）。



最も遠い人への距離 = 4  
平均 = 2.5



最も遠い人への距離 = 2  
平均 = 1.5

Figure 1 組織の「形」の単純な例

このように、多分野において得られた知見を用いて研究をおこなうには、多分野の研究方法论を複合的に用いる必要があると考え、ここでは方法论においても数学的研究、シミュレーション、定性的研究・定量的研究が入り混じったものを用いた。特に、近年注目されている人工知能の活用である分散人工知能（マルチエージェント・コンピューティング、マルチエージェント・システム）の技術を活用し、人工的・仮想的に社会を構築し、実験・検証するという方法をとった。これに加え、知見を実際の企業で活用するという社会実証実験的な方法も取り入れた。

#### 4. 研究成果

研究成果は *IEEE Access*、*Management and Business Review*、『産業経理』、『生産管理：日本生産管理学会論文誌』、『三田商学研究』、*Procedia Manufacturing*、*Annals of Business Administrative Science* などの国内外の学術誌および 5 冊の著書において発表された。その中でも今回の研究成果の中心となったものに『三田商学研究』に発表した「ありきたりな個人の卓越した組織：資源とアイデアの滞留に着目したイノベーション“それ自体”のマネジメント試論」がある。そこで、以後に当該論文の内容を引用・要約する。

当該論文は、イノベーション「そのもの」の立場から、イノベーションに必要な資源とアイデアの流れを管理するという「イノベーションそれ自体のマネジメント」への序説的位置づけの試論である。「イノベーションそれ自体のマネジメント」はイノベーションとイノベーションの種（アイデアと資源）とが社会における人のつながり（ネットワーク）を通して伝播していく様子をモデル化する。そして、イノベーションが資源とアイデアの 2 要素の結合によって創出され、さらに別のイノベーションと連鎖する様子を描き出すものである。当該論文では、このうちイノベーション創出段階について、マルチ・エージェント・シミュレ

ーション技術を用いた仮想実験例を紹介する。より具体的には、本稿は「資源とアイデアとがそれぞれ別の場所に滞留した場合にイノベーションが不活性化すること」、「滞留のマネジメントと在庫のマネジメントと本質的に同型である」こと、それゆえに「在庫のマネジメントを得意とする生産管理論の知見がイノベーションの活性化・不活性化のマネジメントに示唆を与えうることを」を出発点にして、イノベーション創出に有効な社会・組織・制度を考えた。仮想実験からは、資源とアイデア（情報）の渋滞の解消という視点から、梁山泊型、高信頼フィクサー型、リーンスタートアップ型、起業サークル型、科学者集団型、ムラ社会型などの制度が考えられ、それぞれ異なった特徴があることが判明した。こうした特徴の中には、小さなイノベーション（悪貨）が大きなイノベーション（良貨）を駆逐する「イノベーションのグレシャムの法則」や、世間知らずが大きなイノベーションに寄与する「井の中の蛙の効用」と表現できるような発見があった。ただし、イノベーションそれ自体のマネジメントは、いまだ研究の端緒にいたばかりであり、シミュレーション・モデルも探索的段階に留まっている。

報告者は、こうした研究をさらに進めるべく、アイデア（知識）のマネジメントのあり方や、組織間関係の形態とアイデアの伝播の関係などについても研究をおこなった。こうした研究成果は、おおむね当初の予定通りに達成できたと考えている。ただし、ここでの研究は、以後も継続していくことでより大きな成果が生まれる可能性があると考えます。そのため、研究期間終了後は、学校法人慶應義塾が主催する研究費獲得制度等を通じて、ここでの研究を継続していきたい。

5. 主な発表論文等

〔雑誌論文〕 計18件（うち査読付論文 7件 / うち国際共著 2件 / うちオープンアクセス 4件）

1. 著者名 岩尾俊兵	4. 巻 64
2. 論文標題 ありきたりな個人の卓越した組織：資源とアイデアの滞留に着目したイノベーション“それ自体”のマネジメント試論	5. 発行年 2021年
3. 雑誌名 三田商学研究	6. 最初と最後の頁 59-78
掲載論文のDOI（デジタルオブジェクト識別子） なし	査読の有無 無
オープンアクセス オープンアクセスとしている（また、その予定である）	国際共著 -

1. 著者名 lwao, S.	4. 巻 2
2. 論文標題 Continuous Improvement Revisited: Organization Design as the Last Step in Gaining the Full Competitive Advantage of Kaizen	5. 発行年 2022年
3. 雑誌名 Management and Business Review	6. 最初と最後の頁 56-61
掲載論文のDOI（デジタルオブジェクト識別子） なし	査読の有無 有
オープンアクセス オープンアクセスではない、又はオープンアクセスが困難	国際共著 -

1. 著者名 岩尾俊兵・加藤木綿美	4. 巻 29
2. 論文標題 トヨタ自主研にみる組織間知識共有・知識創造マネジメント	5. 発行年 2022年
3. 雑誌名 生産管理：日本生産管理学会論文誌	6. 最初と最後の頁 1-13
掲載論文のDOI（デジタルオブジェクト識別子） なし	査読の有無 有
オープンアクセス オープンアクセスではない、又はオープンアクセスが困難	国際共著 -

1. 著者名 岩尾俊兵	4. 巻 82
2. 論文標題 トヨタ生産方式に残る謎の会計学的解明：なぜジャスト・イン・タイムと自動化がTPSの二本柱なのか？	5. 発行年 2022年
3. 雑誌名 産業經理	6. 最初と最後の頁 108-119
掲載論文のDOI（デジタルオブジェクト識別子） なし	査読の有無 有
オープンアクセス オープンアクセスではない、又はオープンアクセスが困難	国際共著 -

1. 著者名 岩尾俊兵	4. 巻 34
2. 論文標題 根拠なき日本悲観論：企業に必要な「コンセプト化」の力	5. 発行年 2022年
3. 雑誌名 Wedge	6. 最初と最後の頁 36-39
掲載論文のDOI（デジタルオブジェクト識別子） なし	査読の有無 無
オープンアクセス オープンアクセスではない、又はオープンアクセスが困難	国際共著 -

1. 著者名 岩尾俊兵	4. 巻 841
2. 論文標題 温故知新のマネジメント研究	5. 発行年 2022年
3. 雑誌名 三色旗	6. 最初と最後の頁 1-7
掲載論文のDOI（デジタルオブジェクト識別子） なし	査読の有無 無
オープンアクセス オープンアクセスではない、又はオープンアクセスが困難	国際共著 -

1. 著者名 岩尾俊兵	4. 巻 101
2. 論文標題 文学的経営学序説：文学と経営の対立の誤りを正す	5. 発行年 2022年
3. 雑誌名 表現者クライテリオン	6. 最初と最後の頁 1-10
掲載論文のDOI（デジタルオブジェクト識別子） なし	査読の有無 有
オープンアクセス オープンアクセスではない、又はオープンアクセスが困難	国際共著 -

1. 著者名 岩尾俊兵	4. 巻 100
2. 論文標題 「新しい日本型資本主義」のカギは「イノベーションの民主化」にあり	5. 発行年 2021年
3. 雑誌名 表現者クライテリオン	6. 最初と最後の頁 92-97
掲載論文のDOI（デジタルオブジェクト識別子） なし	査読の有無 無
オープンアクセス オープンアクセスではない、又はオープンアクセスが困難	国際共著 -

1. 著者名 岩尾俊兵	4. 巻 109
2. 論文標題 エアビー「アフガン難民2万人への住居提供」がただの慈善ではない3つの理由	5. 発行年 2021年
3. 雑誌名 週刊ダイヤモンド	6. 最初と最後の頁 76-77
掲載論文のDOI (デジタルオブジェクト識別子) なし	査読の有無 無
オープンアクセス オープンアクセスではない、又はオープンアクセスが困難	国際共著 -

1. 著者名 岩尾俊兵	4. 巻 99
2. 論文標題 「カイゼン」に見る経営戦略の差	5. 発行年 2021年
3. 雑誌名 週刊エコノミスト	6. 最初と最後の頁 48-49
掲載論文のDOI (デジタルオブジェクト識別子) なし	査読の有無 無
オープンアクセス オープンアクセスではない、又はオープンアクセスが困難	国際共著 -

1. 著者名 岩尾俊兵	4. 巻 69
2. 論文標題 「闘争の人」と「和合の人」	5. 発行年 2021年
3. 雑誌名 一橋ビジネスレビュー	6. 最初と最後の頁 43-43
掲載論文のDOI (デジタルオブジェクト識別子) なし	査読の有無 無
オープンアクセス オープンアクセスではない、又はオープンアクセスが困難	国際共著 -

1. 著者名 岩尾俊兵	4. 巻 99
2. 論文標題 現場への権限委譲に潜む「ワナ」	5. 発行年 2021年
3. 雑誌名 週刊エコノミスト	6. 最初と最後の頁 48-49
掲載論文のDOI (デジタルオブジェクト識別子) なし	査読の有無 無
オープンアクセス オープンアクセスではない、又はオープンアクセスが困難	国際共著 -

1. 著者名 岩尾俊兵	4. 巻 99
2. 論文標題 現場と本社の最適な「距離感」	5. 発行年 2021年
3. 雑誌名 週刊エコノミスト	6. 最初と最後の頁 72-73
掲載論文のDOI (デジタルオブジェクト識別子) なし	査読の有無 無
オープンアクセス オープンアクセスではない、又はオープンアクセスが困難	国際共著 -

1. 著者名 岩尾俊兵	4. 巻 99
2. 論文標題 革新生む組織に見る「5%」の差	5. 発行年 2021年
3. 雑誌名 週刊エコノミスト	6. 最初と最後の頁 40-41
掲載論文のDOI (デジタルオブジェクト識別子) なし	査読の有無 無
オープンアクセス オープンアクセスではない、又はオープンアクセスが困難	国際共著 -

1. 著者名 岩尾俊兵	4. 巻 99
2. 論文標題 「起業ブーム」の意外な落とし穴	5. 発行年 2021年
3. 雑誌名 週刊エコノミスト	6. 最初と最後の頁 42-43
掲載論文のDOI (デジタルオブジェクト識別子) なし	査読の有無 無
オープンアクセス オープンアクセスではない、又はオープンアクセスが困難	国際共著 -

1. 著者名 Iwao, S , Kato, Y	4. 巻 18
2. 論文標題 Why can Toyota's keiretsu recover from earthquakes quickly?	5. 発行年 2019年
3. 雑誌名 Annals of Business Administrative Science	6. 最初と最後の頁 251-262
掲載論文のDOI (デジタルオブジェクト識別子) 10.7880/abas.0191022a	査読の有無 有
オープンアクセス オープンアクセスとしている (また、その予定である)	国際共著 -

1. 著者名 Yamamoto, Y , Iwao, S	4. 巻 38
2. 論文標題 Coordination in improvements at manufacturing plants and its effect on improvement capabilities	5. 発行年 2020年
3. 雑誌名 Procedia Manufacturing	6. 最初と最後の頁 1566-1573
掲載論文のDOI (デジタルオブジェクト識別子) 10.1016/j.promfg.2020.01.129	査読の有無 有
オープンアクセス オープンアクセスとしている (また、その予定である)	国際共著 該当する

1. 著者名 Iwao Shumpei, Park Ye-Chan, Park Young-Won, Hong Paul C.	4. 巻 11
2. 論文標題 A New Mathematical Learning Curve Model Based on the Empirical Analysis of Japanese Sharing Economy Companies	5. 発行年 2023年
3. 雑誌名 IEEE Access	6. 最初と最後の頁 4944 ~ 4955
掲載論文のDOI (デジタルオブジェクト識別子) 10.1109/ACCESS.2022.3233391	査読の有無 有
オープンアクセス オープンアクセスとしている (また、その予定である)	国際共著 該当する

〔学会発表〕 計17件 (うち招待講演 10件 / うち国際学会 3件)

1. 発表者名 岩尾俊兵
2. 発表標題 イノベーション “そのもの” のマネジメント理論を求めて：『日本 “式” 経営の逆襲』への橋渡し
3. 学会等名 組織学会研究発表大会・組織学会高宮賞受賞者セッション (招待講演)
4. 発表年 2021年

1. 発表者名 岩尾俊兵
2. 発表標題 全社戦略としてのカイゼンの可能性：日本式イノベーションは世界に通用するか？
3. 学会等名 国際戦略経営研究学会 (招待講演)
4. 発表年 2021年

1. 発表者名 塩谷剛・岩尾俊兵
2. 発表標題 マクロ現象としての「両利きの経営」とマルチレベル分析の可能性
3. 学会等名 組織学会年次大会
4. 発表年 2021年

1. 発表者名 岩尾俊兵
2. 発表標題 イノベーションと変化「それ自体」のマネジメントの可能性
3. 学会等名 日本経営学会関東部会シンポジウム（招待講演）
4. 発表年 2021年

1. 発表者名 岩尾俊兵
2. 発表標題 日本式DXに必要な「灯台下暗し」の発想
3. 学会等名 Lean Conference Japan 2022（招待講演）
4. 発表年 2022年

1. 発表者名 岩尾俊兵
2. 発表標題 『イノベーションを生む“改善”』から『日本“式”経営の逆襲』へ
3. 学会等名 日本生産管理学会学会全国大会（招待講演）
4. 発表年 2020年～2021年

1. 発表者名 Iwao, S. & Park, Y.
2. 発表標題 Characteristics of Sharing Economy in Japan: An Empirical Study of Japanese Firms
3. 学会等名 Global Supply Chain Management Conference (国際学会)
4. 発表年 2020年～2021年

1. 発表者名 岩尾俊兵
2. 発表標題 連鎖と表象としての改善：『イノベーションを生む“改善”』への橋渡し
3. 学会等名 組織学会研究発表大会（招待講演）
4. 発表年 2020年～2021年

1. 発表者名 岩尾俊兵・加藤木綿美
2. 発表標題 サプライヤー参加型の小集団改善活動における傾注マネジメントの有効性：トヨタ自主研はいかに知識共有を促進しているのか？
3. 学会等名 日本生産管理学会学会全国大会
4. 発表年 2020年～2021年

1. 発表者名 岩尾俊兵
2. 発表標題 災害復旧の知識マネジメント
3. 学会等名 組織学会研究発表大会
4. 発表年 2019年

1. 発表者名 Yamamoto, Y, Iwao, S
2. 発表標題 Coordination in improvements at manufacturing plants and its effect on improvement capabilities
3. 学会等名 2019 International Conference in Flexible Automation and Intelligent Manufacturing (FAIM) (国際学会)
4. 発表年 2019年

1. 発表者名 Iwao, S., Kato, Y.
2. 発表標題 Why can Toyota's Keiretsu recover from earthquakes quickly?: Inter-firm knowledge sharing and utilization for disaster management
3. 学会等名 ABAS Conference 2019 Summer
4. 発表年 2019年

1. 発表者名 岩尾俊兵, 朴誉賛, 朴英元
2. 発表標題 学習へと続く険しく曲がりくねった道: シェアリングエコノミー産業における学習曲線の実証分析と新たな数理モデルの提案
3. 学会等名 日本経営学会中部部会 (招待講演)
4. 発表年 2022年

1. 発表者名 原泰史, 岩尾俊兵, 赤松直樹
2. 発表標題 感性型サービス・イノベーションの普及過程
3. 学会等名 組織学会研究発表大会
4. 発表年 2022年

1. 発表者名 岩尾俊兵
2. 発表標題 経営学の未来、未来の経営学
3. 学会等名 臨床経営研究会（招待講演）
4. 発表年 2022年

1. 発表者名 岩尾俊兵
2. 発表標題 学術書籍出版への道：書籍出版をめぐる「3段階の意図せざる読解連鎖」
3. 学会等名 組織学会年次大会（招待講演）
4. 発表年 2022年

1. 発表者名 Iwao, S.
2. 発表標題 Innovation Strategies and Organization Designs in the Japanese Automotive Industry
3. 学会等名 East Asian Consortium of Japanese Studies: The 6th International Conference（招待講演）（国際学会）
4. 発表年 2022年

〔図書〕 計5件

1. 著者名 岩尾 俊兵	4. 発行年 2021年
2. 出版社 日経BP 日本経済新聞出版本部	5. 総ページ数 266
3. 書名 日本“式”経営の逆襲	

1. 著者名 岩尾俊兵	4. 発行年 2019年
2. 出版社 有斐閣	5. 総ページ数 298
3. 書名 イノベーションを生む“改善”：自動車工場の改善活動と全社の組織設計	

1. 著者名 岩尾 俊兵	4. 発行年 2022年
2. 出版社 KADOKAWA	5. 総ページ数 296
3. 書名 13歳からの経営の教科書「ビジネス」と「生き抜く力」を学べる青春物語	

1. 著者名 組織学会	4. 発行年 2022年
2. 出版社 白桃書房	5. 総ページ数 260
3. 書名 組織論レビューIV	

1. 著者名 Park, Y. W.	4. 発行年 2022年
2. 出版社 Springer	5. 総ページ数 269
3. 書名 Ambidextrous Global Strategy in the Era of Digital Transformation	

〔産業財産権〕

〔その他〕

-

6. 研究組織

氏名 (ローマ字氏名) (研究者番号)	所属研究機関・部局・職 (機関番号)	備考
---------------------------	-----------------------	----

7. 科研費を使用して開催した国際研究集会

〔国際研究集会〕 計0件

8. 本研究に関連して実施した国際共同研究の実施状況

共同研究相手国	相手方研究機関
---------	---------